「比べる」ことでせまる音楽の「対話」の魅力

～思いや意図をもって表現する子どもを育てるために～

江　田　　司

和音は，もともと私たちの古くからの生活様式，紙と木と畳でできたきわめて残響の少ない住居に住む日本人とは相容れないものであったと考えられる。西洋音楽が入って１００年以上経った今でもなお日常的生活的に，子どもたちにとって和音は遠い存在であると私には感じられる。

本研究でⅣ度の和音を取り上げたもっとも根本的なところでの私の考えは，「調のある音楽では和声への理解（感受性ともいえる）なくしては，その醍醐味を味わうことができないのではないか」という点にある。感じ取った和音の雰囲気を同じ楽曲の他の和音と，あるいは同じ楽曲を和音に着目して違う演奏で聴き比べるところに，調のある音楽を読み解く鍵があるのではなかろうか。

キーワード：思いや意図，比べる，音楽的な対話，Ⅳ度の和音，共通事項

１．研究の目的

本研究の目的は，「思いや意図」の基となる客観的な事実を探ることである。

音楽作品そのものが様々な「対話」によって構成されている。本研究ではとくに歌唱曲における歌詞とⅠ，Ⅳ，Ⅴの和音記号に代表される伴奏和音の流れ（和声）との「対話」に着目する。

具体的には，歌詞とⅣ度の和音がもつ表情との関係性ついて明らかにすることで，これまで歌詞理解を中心として展開されてきた「思いや意図をもって表現する」活動を一歩進めることができるのではないかと考えたのである。

従来の《大切にしたい歌詞》→「思いや意図」をもって表現する活動に加え，《Ⅳ度の和音》→《大切にしたい歌詞》→「思いや意図」と，《大切にしたい歌詞》を《Ⅳ度の和音》が使われている部分にも広げてみることで，「思いや意図」の客観的な判断基準が探れるのではないかと考えたのである。

学習指導要領上の位置づけとしては，〔共通事項〕で示されているアとイの内容＝音楽を形づくっている要素，すなわち音楽を特徴付けている要素（和声の響き，音階や調）や音楽の仕組み（音楽の縦と横の関係），様々な用語（音符，強弱記号，和音記号等）の理解などに関連付けられる。

さらに，表現や鑑賞の活動を通して，思いや意図をもって主体的に表現できる子どもを育てるために，「比べる」をキーワードとした。子どもたちには音楽作品に内在する様々な対話的な要素が，「演奏表現によって大きく異なる」ことを捉えさせることができると考えたからである。

２．研究方法

小学校の課程では「和音及び和声の指導については，合唱や合奏の指導を通して和音のもつ表情を感じ取ることができるようにすること。また，長調及び短調の楽曲においてはⅠ，Ⅳ，Ⅴ及びⅤ$_7$などの和音を中心に指導すること。」[*1]とあるが，実際の教科書では，これらの和声進行のみを用いて作られた楽曲は低学年から徐々に減少し，高学年では約30曲中２曲程度ときわめて少ない事実がある。[*2] さらに，これらの２曲が和音の学習に関連した楽曲であることからもわかるように，実際に教科書で扱われる楽曲のほとんどが，学年が上がるにつれて様々な和音や和声構造をもっている。そこで研究の進め方としては，作曲家たちが歌詞を伴った楽曲を創作する際に，きわめて注意深く用いることの多いⅣ度の和音を，音楽的活動によって子どもたちに感じ取らせるとともに表現に生かせるよう理解を求めたい。そこで，子どもたちが１年生のときから「リクエスト・タイム」で使い親しんでいる歌集『歌はともだち』を用いてる。歌集の指定した楽曲からⅣ度の和音部分を見つけ，同曲の違った演奏を聴き比べる活動から，Ⅳ度の和音がもつ魅力を「実感」として子どもたちが自分たちなりの言葉で理解ができればよいと考えている。活動は男女混合４人グループでの協同的な学習とする。

【「比べる」活動を設定する３つの場面】

①雰囲気の変化を体の動きで感じ取るために，和声進行から主要三和音を聴き取る場面。

②歌詞だけを見て大切にしたい部分と，楽曲のⅣ度の和音の部分を見つける場面。

③表現の可能性に気付くために，楽曲のⅣ度の部分に着目して様々な歌唱表現で聴く場面。

３．０．事例

ここでは，平成２１年１０月に５年生で行った題材「重なり合う音の美しさを味わおう～Ⅳ度の和音がもつ魅力～」について報告する。

３．１．学習の進め方

第１学期に学習した楽曲の長調・短調を判別する方法を発展させた。すなわち楽譜の最後に記されたコードネームがほぼその曲の調を示しているところから，／①提示した数曲の中から調べたい曲を選ぶ。次に，楽曲の最後の小節を見る。コードネームが（例）「C」であれば，「シー・メイジャー」で「ハ長調」の曲である。／②４度上のコードネーム，すなわち，曲中から「F（エフ・メイジャー）」を見つければ，それがⅣ度の和音を表していることになる。／③Ⅳ度の和音が使われている歌詞（の部分）を書き出し／④その部分の旋律と歌詞がお互いに関連しながら，その楽曲の中で「どのような感じ」を醸し出しているかを仲間と話し合い言葉で表す。（→次の曲を選び，時間まで①～④を繰り返す。）／⑤意見を発表し，聴いているグループにも歌ってもらい，発表した意見について意見交流をして，のちにグループで自己評価をする。

１曲ではなかなか感じ取れないことも，Ⅳ度の部分に着目して様々な楽曲を比べてみることで，旋律と歌詞と和声が見事に組み合わされていることを子どもたちは感じ取れた。

３．２．主に使用した教材等

◆『静かにねむれ』（武井君子作詞／フォスター作曲／浦田健次郎編曲）

◆『ありがとう　さようなら』（井出隆夫作詞／福田和禾子作曲）

『ありがとう　さようなら』を聴き比べるために次の２種類のCDを鑑賞教材として使った。

①ビーカブー，吉田直子，コロムビア・オーケストラによる演奏／演奏時間２分49秒／CD番号CG-2499／さすがプロフェッショナルの演奏。調性感や和声感に優れているばかりでなく編曲，声の重なり，声の魅力ともに満点の演奏である。

②井上美都指揮／森の木児童合唱団／ピアノ：遠藤直子／演奏時間／２分58秒／CD番号：GES-13845-48／ゆったりとしたなかに端正に曲を仕上げている。

◆和音の変化が聴き取りやすい鑑賞教材

《Ⅰ度→Ⅳ度の和音》

『ハレルヤ・コーラス』（ヘンデル作曲）

『故郷の人々（スワニー川）』『やさしいアニー』（フォスター作曲）

《Ⅰ度→V_7度の和音》

『常動曲（無窮動）』作品２５７（ヨハン・シュトラウス作曲）

《Ⅰ度→Ⅳ度→Ⅴ度の和音》

子どものための音楽から『町のうた（邦題）』（カール・オルフ作曲）

３．３．題材（授業）の実際

題材名：『重なり合う音の美しさを味わおう』
～Ⅳ度の和音がもつ魅力～

題材について：本題材では「音楽的な対話」の１つ「旋律（メロディ）と和声（ハーモニー）の関係」に着目した。和音（コード）が２つまたは３つ以上連続したものを和声という。和音同士の関係性が機能性となって生まれ，いわゆる西洋音楽で「重なり合う音の美しさ」のもとをなす。一般的には，属和音（ドミナント）であるⅤ度の和音と主和音（トニック）であるⅠ度の和音は，式典などでのピアノの合図「（起立）礼・直立」で示されるように，「緊張と弛緩」の関係をもつことがよく知られている。Ⅴ度の和音が「緊張・不安定」を，Ⅰ度の和音が「安定」を表すのであるが，その中にあって下属和音（サブドミナント）であるⅣ度の和音は，Ⅰ度の和音から「発展」的な感じを与える機能をもつ。さらに，Ⅳ度の和音は楽曲の中で注意深く扱われている。これらの感覚は，調性をもつ音楽を表現する上で不可欠な要件であるにもかかわらず，実際の教育現場ではほとんど顧みられていないのではないだろうか。

導入では教科書教材『静かにねむれ』を歌唱と楽器伴奏で扱った。その後は正直迷走を続けた。というのも少しでも理屈に踏み込んでしまうと「難しい」という反応があり，和音体操など体で感じ取る活動は楽しめても，なかなか表現活動の思いや意図の中核にまで達するような感受性を育むことができないでいた。ちょうどⅠ・Ⅳ・Ⅴの和音記号は階名唱のようなもので，「調」というものの理解（感じ取り）ができていないと，まったく何のことか，どういう有用性があるのかを説明すらできない。本学級の子どもたちには，１学期にコードネーム（和音名）に着目した学習を行い，少なくとも楽譜から視覚的に調判断ができるようになってきていた。和音の変化を感じ取りやすい鑑賞教材を挿入しつつ，「学校用ハーモニー・キーボード」（SHK-1000 Ⅱ／ヤマハ）のお世話になった。『静かにねむれ』では，今までキーボードを触ったこともない子どもたちが前に出て，歌の伴奏をしたり，『ハレルヤ・コーラス』のメロディが，このキーボードのコードボタンを押すだけで様々に表現できることにも驚いた。

まだまだ「Ⅳ度の和音」といっても，雲をつかむような顔をしている子どもたちであった。

①Ⅳ度の和音の響きを感じ取る。

本時では，フォスター作曲「やさしいアニー」（原曲）を聴いて「アニー(Annie)」の名前を聴き取る活動から始めた。歌詞に「アニー」が出たら挙手をする約束をして聴取。「アニー」の部分で使われている和音がⅣ度であることを知り，旋律線からⅣ度の和音の響きをつかんだ。次に，

②『ありがとう　さようなら』で大切に歌いたい部分について，学級の仲間の多様な考えを知る。

拡大楽譜を用意した。班ごとに前に出て，一人ずつ自分が「大切にしたい歌詞」と考えた部分に付箋紙を貼った。付箋紙は班ごとに色分け（９種類）をしておき見やすくした。１班ずつ付箋紙を貼るため，待つ時間を利用して考えをまとめた。歌詞について言葉ごとに（起立し）自分の意見を発表するとともに仲間の意見を聴いた。このとき，意見は板書したりまとめたりせず，対話となるよう心がけた。

③Ⅳ度の和音が使われている部分を感じ取りながら歌唱表現をする。

調は変ホ長調。子どもたちは最後のコードがＥ♭（イー・フラット・メイジャー）であるところから即座に調を言い当てた。主音がＥ♭であるところから，Ⅰ＝Ｅ♭，Ⅳ＝Ａ♭，Ⅴ＝Ｂ♭と判別し，拡大楽譜に「Ⅳ」の和音記号を書き込んだ。ここで，子どもたちが大切にしたい歌詞の部分が必ずしも「Ⅳ」の部分でないことが判明した。

【「大切にしたい言葉」Ⅳ度以外＝複数回答】
「ありがとう」（１３人）「友だち」（１１人）「かがやいてた」（１２人）「ありがとう」（４人）「友だち」（１６人）
【「大切にしたい言葉」Ⅳ度部分＝複数回答】
「さようなら」（１人）「えがお」（５人）「夏の」（１人）「日差し」（１人）「みんな」（１人）「まぶしく」（１人）「さようなら」（１人）

そこで，Ⅳ度の和音が付けられている第２小節目の歌詞「さようなら」をただ１人選んだ女児を指名して，学級の仲間に何度か歌ってもらい「自分が思っている（この歌詞を大切にした）歌い方になっているかどうか」を判別させた。１度目は「違う！」と言い，２度目は「…？」。３度目に，やっと「こんなもんかな！？」とOKを出した。

プリントに和音記号を記入した後，Ⅳ度の部分を感じながら歌った。ここで２種類のCDで『ありがとう　さようなら』を聴き比べた。子どもたちの反応は，後者を「ベタな歌い方」と表現したことでもわかるように，はっきりと「和音の流れを感じている歌い方」と「感じていないであろう歌い方」を判別した。

《写真：歌い方を比較して挙手で確認する》

本時を終えて，もう一度同じ曲の２つの演奏（演奏者を伏せＡ，Ｂとした）を聴き比べ既述させた結果，全員がＡとＢの演奏の違いを，Ⅳ度の和音部分の歌い方の違いはもちろん，旋律線の捉え方，リズムの取り方，テンポ，レガート的な歌い方の差異，演奏形態や声の音色の違い，曲の山の作り方等々に至るまで，全員が詳細に記述していた。また，歌唱の活動を行ったところ，伴奏の和音の変化を聴きながら歌う様子が見られた。もちろん歌唱表現も大きく変化した。

４．事例の考察

◆『ありがとう　さようなら』の歌唱表現が，時間の経過とともに「思いや意図をもった」方向へと変化していった。これには，『ありがとう　さようなら』の拡大楽譜を用意したことや，大切にしたい歌詞の言葉（文節単位）に，子どもたち一人ひとりが付箋紙（9色のポストイット／班ごとに違う色）を貼っていったことが授業に見通しを与えたと考えられる。これによってクラスの仲間の考えが数量的な偏りとともに一目瞭然となった。（ＫＪ法の利用）

次に，その理由を述べたのであるが，さらに変ホ長調の主和音からⅣ度の和音「Ａ♭」を探し，Ⅳ度の和音が示す部分と大切にしたい歌詞の言葉と比較した。結果は大きく異なっていた。そこで，Ⅳ度の和音の部分の言葉に着目していた１人の女子を指名。学級の仲間たちの歌唱表現を，１人の女子が「自分の思っている歌い方になっているか」の観点で判定（ダメ出し）する過程でクラスの歌唱表現は改善されていった。ここで新たな着眼点としてⅣ度の和音に着目してそこに書かれている言葉にも意識を向けることが学ばれた。

◆『ありがとう　さようなら』を，２つの演奏で聴き比べた場面では，これまで何気なく聴いて

いた演奏が，Ⅳ度の和音の響きに着目して聴取することで，演奏の質そのものを批評できる子どもたちとなった。プロの演奏（ビーカブー）では，Ⅳ度の和音が使われている部分「♪～さよなら～」「♪～えがお～」など伴奏の響きにこうした歌い方になっているのに対し，児童合唱の方では（子どもの表現を借りれば）「ベタな歌い方」となっていた。

◆課題に向かう対話を深めるために次のような工夫を講じた。

①一人ひとりが課題に向かう財産づくりとしての活動として，本時に至るまで，①Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ度の和音名の意味を知るために，「楽曲の最後尾に付けられたコードネームからの短調長調の調性判断」「英語音名の理解」，②楽曲でのⅣ度の和音の使われ方を感じ取るために，「Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ度の和音体操」「Ⅰ・Ⅴだけでできている曲（常動曲）」「Ⅰ・Ⅳだけでできている曲（ハレルヤコーラス）の鑑賞」「フォスターの楽曲の比較聴取」などの活動を行ってきた。

②課題を明示した学習（ワーク）シートを用意した。

《学習シート例》

課題１〔個人〕／上の歌詞や左の楽譜を見て，ここを大切にしたいと思う言葉や旋律（せんりつ）に○印を付けて、その理由を下に書きなさい。

《理由》（記入欄）　◎印を一番大切（単語）な言葉に記入　○印を次に大切（単語）に記入

課題２〔班〕／課題１で考えたことを話し合って、班の代表が発表しなさい。意見はまとめなくてよろしい。話し合った内容は全員が歌詞や楽譜にメモをしておきなさい。　《班での意見を書く。まとめなくてもよい。》　＊意見がまとまったら「チェック」と「ポストイット」を！！

課題３〔個人〕／Ⅳ度の和音が使われている部分で「ステキだな！」と思うところについて、あなたの感想を書きなさい。班の仲間と意見交換をしてもよろしい。

◆協同的な学びを創るために次のような工夫をした。

小学校学習指導要領では，ハ長調とイ短調の視唱，視奏をその範囲としているが，今回の学習では他の調性への理解を必要としたため，既述のように「調性判断」や「和音記号の意味理解」を求めた。この内容はかなり高度なものであるため，協同的な学習を何度も積み重ねながら理解を図っていった。

本時では，教材の特性から個人的な思考や一斉学習に重きを置いた。教科書教材『静かにねむれ』では，「大切にしたい言葉」と「Ⅳ度の響き」との相関関係が見事に取れていたのに対し，本時で扱った『ありがとう　さようなら』では，子どもたちにとって必ずしもわかりやすい状態で見えなかった。瞬時の判断で，前述の課題２を「みんなで考える」課題としてワンステップ下げた。このあたりは授業計画と大きく外れた部分であった。子どもたちの様子を見ると，９班に分けておいたこともあって，インフォーマルな状態での情報交換がなされ，わからない点などを補い合っていた。

５．成果と課題

学びの質の高まりをめざすためには，「異質なもの」「学習の結果当然に導き出されるであろう結論と異ってみえるもの」の果たす役割を事例とともに明らかにしていく必要性を感じた。

＊教科書教材は，ねらいに即して無駄なものや未習のものを省き，いわゆる「純粋培養的」に学習内容が提示されていることが多く見受けられる。一般化を視野に入れた教科書の扱いをしたい。

「比べる」中で見つけた和音関連の教材「フォスター作品」「オルフ作品」であるが，前者は，主要三和音（Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ度の和音）がきわめてシンプルな形で使われている楽曲が多い。また後者は，教育的意図をもってこれらの和音を用いている。

音楽的な「対話」の観点から，旋律と歌詞と和音の関係についてであるが，Ⅳ度の和音はきわめて注意深く諸作品の中で用いられている。これまでおもに歌詞や旋律から「思いや意図をもって表現する」ことをねらってきた。あらたに，「曲の山を築く経過的な部分で」「歌詞の言葉に含まれる微妙なニュアンスを表現するために」など，Ⅳ度の和音に着目することで，音楽的な「対話」を読み解く鍵が隠されていることがわかった。

参考文献

*1小学校学習指導要領　第２章　第６節　音楽「第３指導計画の作成と内容の取り扱い」2(2)　平成20年３月告示

*2教育芸術社『小学生の音楽』５年及び６年

『新音楽事典～楽語』音楽之友社

「ピアノが苦手でも授業はうまくいく！」（教育音楽小学版2006年12月号，江田連載）

RANDEL　The Harvard Dictionary of Music　(FOURTH EDITION)］

和歌山大学教育学部附属小学校・平成２１年度教育研究発表会『要項』及び当日資料『音楽科学習指導案』